

下へ突進する気持ちになったこと、宗教のためツハード（聖戦）と自爆していることを思うと、宗教の禁止もむべなるかなと感じます。

私は今、孫子曾孫の代まで、召集から帰還までの三年七カ月を、全くの無駄に決してさせたくないと思っております。

【執筆者の紹介】

大正三年六月二十日 清水市南矢部に生まれる

昭和八年四月 静岡市用宗食品会社就職

昭和九年六月 徴兵検査丙種合格

昭和十四年 結婚

昭和十九年十一月十日 応召

昭和十九年十一月二十三日 満州海拉爾、満州歩

兵第二五五連隊通信

中隊配属

終戦時 一等兵

一九四五年十月二十一日 チタ州カダラ地区ハハ

トイへ収容される

一九四八年五月二十五日 舞鶴入港 六月一日帰

宅

（静岡県 熊谷 精一）

樺太虜囚物語

愛知県 兵 東 政 夫

大正十一年生まれ

大正十一（一九二二）年九月二日、現在の豊橋市小浜町、農家の二男として生まれる。

村外れの「上原」と呼ぶ洪積台地にあった騎兵連隊が、昭和七（一九三二）年九月二十六日の午後、満州に移駐していった。その出発の刻間近、軍装した軍馬の頭が狂奔して放馬、身送りの人波を駆け抜けていった。その後を一人の兵隊が息せき切って追っていった。緊張と不安の顔に汗がしたたり、晴れの日の悲しい出陣であった。幼い私はその光景が忘れ難く、いつまでも胸を痛め

た。

農家の生きる道を憂えた親は二人の息子を教員にすることによって一安堵したが、兄はすでに戦地にあり、この弟も教壇に立って、わずか八カ月で徴集された。昭和十七年末、山村の十七人の教え子たちと村境の峠でみんな涙を流して別れた。

私は満州奉天省海域にあった関東軍第二九師団歩兵第一八連隊に入営、速射砲中隊に配属された。南満とはいえ、零下二〇度の毎朝の馬手入れは、馬部隊の兵隊にはつらかった。幼い日、放馬した馬を追う悲しみの出征兵士を想った。

昭和十九年一月、内地の予備士官学校に入校、予想もなかった優れた人たちの薫陶を受けることになるが、この夏、原隊はサイパン、グアムで玉砕する。不条理に共に打ちひしがれた同年兵も、私に生涯の生き方を授けてくれた初年兵掛助手和田順一上等兵とも永訣であった。卒業した私は、樺太混成旅団歩兵第一二五連隊に配属され、北緯五〇度の国境守備に就いた。南方戦線は熾烈

を極めていたが、この北辺はまだ静謐で、トナカイの鈴の音を聞く宵もあった。

昭和二十年三月、旅団は第八師団に改編、増強されたものの、師団が国境不穩を重ねて訴えても、八月下旬まで中央は対米重点で、南を向いて陣地構築を続けていた。私は新設の歩兵第三〇六連隊に転属、豊原南郊の大沢にあって六月から初年兵掛をさせられていた。二十三歳の夏のことであった。

昭和二十年八月九日早朝、国境「日の丸」兵舎が砲撃を受けたことを聞き、ソ連参戦を知った。十三日、私は速射砲一個小隊を率いて、単独、国境に向かう。この夕、北辺の豊原駅に妖気満ち、連隊長以下幹部から別れの盃を幾杯も受けた。下戸の私は酔うほどに、緊張した隊員を前に気負った訓示を試み、駆けつけた中隊長になだめられる一幕があった。

第八師団の樺太防衛については

戦史叢書『北東方面陸軍作戦』(2)

『樺太防衛の思い出』鈴木康生

『樺太国境守備隊の終焉』鈴木孝範

『樺太終戦史』同刊行会

『樺太一九四五年夏』金子俊男

に詳しい。

樺太東線に沿う道路は戦場から南へ避難する人々がひしめきあっていた。その群衆をかき分けるように列車は北上、国境近くの敷香駅で異様な通告を受ける。

「戦争は終わった。戦闘はするな」と。

状況不明の混乱の中で、私は小隊を連れて南下、豊原駅に着く。どうしたことか、中隊は再度北上命令。空襲下、落合に布陣、自衛戦闘に入る。

八月二十二日、現地停戦協定が知取で成立、二十五日、戦災の落合で武装解除。せめて眼鏡をと思ひ、分解してレンズのみを袋に詰めて隠す。

間もなく労働大隊が編成され、他部隊の者も混じった小隊になる。

「トウキョウ、ダモイ」と喜ばせて、余剰の将校団が去っていくのを、私は崩れた土塀越しに見送った。

この日から私の抑留生活が始まる。

囚われ、あわれ

戦い破れて、落合でとらわれの身となった私たちは、樺太東線を南下して貨車から降ろされ、雨の留多加の集落の道を歩いた。敗残の抑留者たちの行列であった。

昭和二十年九月下旬のこと、水のかれた川のほとり、小さな白樺の生える河原に枯草を引きむしって土の上に敷き、露営する。同じことをしても戦闘中と比べて何とみじめであわれなことか。その第一夜の夜半、激しい雨、目を覚ますと私の体には四枚の毛布が掛けられ、まわりの兵隊は眠ったままを装っていた。「おれはこの兵隊たちに何をしてくれるか」と衝撃を受けた。

雨の朝が明けて、直ちにラーゲル（収容所）作

りが始まった。千人近い一個大隊の人員を詰め込むため、八錐形天幕が幾つか運び込まれた。並んだ天幕の外側に二メートル程の丸太を並べて建て、二十センチの間隔で十段の有刺鉄線を巡らした。最上段は裸の銅線に電流が流された。四囲の望楼からむやみに自動小銃の火が吹き、雨夜は盲射が続いた。私たちの労働大隊は大和中尉の指揮する大和大隊と呼んだ。厚生省の「作業大隊概況表」によると、その構成は

歩兵第二五連隊	三〇人
歩兵第一二五連隊	一〇人
歩兵第三〇六連隊	五一二人
輜重兵第八八連隊	二四四人
第四九飛行場大隊	一〇〇人
第六野戦航空補給廠	四六人
計	九四二人

となっている。

この労働大隊のある日の昼近く、私は五十人を連れて別の作業に分遣、出発することになる。幕

舎の片隅に、汚水に汚れた包帯の足を引きずって、別れに来た本間寅男二等兵の姿が忘れられない。大沢の兵舎で共に暮らした十九歳の初年兵だった。私は逆に励まされてしまっていると、同じ仲間の初年兵たちが私の軍服にしがみつぎ、「連れていってくれ」と泣きながらせがんだ。生来無力の私は、なすすべもなかった。

北辺の秋は早い。垂れこめた鉛色の雲の下を私たちに乗せた二台の米国製のトラックが、砂塵を巻き上げて北西に向かって疾駆する。焼け崩れた廃屋が並び、主を失ったやせ犬がしっぽを垂れたままこちらを向いている。日本軍の速射砲の防盾や車輪が無惨に放置されている。この地に布陣した歩兵第二五連隊のものか。とっさに走り寄って雨水をぬぐってやりたかった。二年半磨き続けた同じ砲だったから。

車上の無言の兵隊の顔の砂塵が土人形のように黄色く積もっていた。暗闇の山峡でトラックは停まった。マンドリン（自動小銃）を抱えた幾人か

のソ連兵たちが何事かわめきながら近づいてくる。こちらはみんな戸惑い、うろたえ、立ちすくむあわれな小羊であった。彼らの卑猥な嘲笑がどす黒く闇夜にこだまする。兵隊が、「ここは大豊だ」という。ここで日本人が丹精込めたジャガイモをソ連が奪い取るために抑留者が作業を続ける。

幾日も幾日も、私たちは編上靴を脱ぐことはなかったが、いつも巻いていた巻脚絆はどうしたのか、もう見ることはなかった。どこかへ棄てたのか（それはダモイの日にわかることになる）。兵隊たちは天幕の周縁に雑のうを枕にして、略帽を被ったまま放射状にたあいなく眠っていた。深夜、ソ連兵との作業連絡を終えて帰ってくると、一本のローソクを囲んで曹長や分隊長たちが私の周りに集まる。そして、私のつたない作業対策を聞いて、ぼそぼそと語る。私は迫力に欠けた声で「みんなして日本に還るんだ」と繰り返すしかない朝晩が続いた。情けない小隊長だった。やが

て、みんなあきらめたのか、わずかに笑顔が戻ってくる日もあった。

偽りのダモイ

昭和二十年十月三十一日、樺太の山々はもう雪で光っていた。それは私たちにとって白魔の到来であった。午後三時ごろか、突如（すべてソ連軍の命令は「突如」であった）抑留者監視兵のワッシャ軍曹が笑顔で、「ホツカイドウ、ダモイ。ビストリー、ダワイ」と。

兵隊は歓喜した。作業に出ている各分隊も次々に帰されてきた。私はすぐさま小隊あげて食糧確保、炊事具一切の携行を伝えた。

私たちを乗せた二台のトラックは「新場」という小さな駅に着いた。暮色迫る駅周辺におびただしいたき火の残り火がくすぶっていた。

ワッシャ軍曹が、「明朝六時、真岡行きの汽車に乗り、それからホツカイドウへ」。

希望の朝が明けた。私はプラットフォームに整

列したみんなの先頭に立っていた。列車が入ってきた。ソ連将校もワッシヤ軍曹も監視兵のカラーヨフも脇に立っていた。

私は機関車のところに走った。機関士はまだ日本人だった。早口に

「いま、真岡に二千人の兵隊が集結、先に数千人がソ連船で出港して行った」。

私はソ連将校のところに走り寄って、
「この汽車は真岡には行かないらしい」とおぼつかないロシア語で口走った。相手は解ったかどうか。

ソ連将校は駅舎に走っていった直後、汽車は動き出してしまった。そして将校は大慌てで機関車のところへと帰った。

私は動かなかった。

分隊長も兵隊もあっけにとられていた。二人の分隊長が私のところへ駆け寄ってきて、私をなじるように凝視した。私は何も言わなかった。何もわかっていないのに私の五感がそうさせたのか、

私の恐怖心と不安からか。

ソ連兵は一樣に両手を振り上げ、投げ出すように「ヨッポイマーチ（馬鹿野郎）」を連発した。

夢破れた兵隊たちは誰も無口になり、雄吠泊というところ（ここはかつて日露戦争時に日本軍が上陸した地点）の半洞窟兵舎の前で、小春日の亜庭湾を眺めていた。

厚生省の「作業大隊概況表」によると、大和大隊は昭和二十年十一月にナホトカ（9）地区に送られたことになっている。さらに厚生省援護局未帰還調査部の「満州・北朝鮮・樺太・千島における日本人の日ソ開戦以後の概況」によると、真岡からソ連に送られた部隊はない。私たちより先に真岡に送られた部隊はどこへ行ったのか。私たちはなぜ真岡行きとなり、それがなぜ断念されたのか。

わずか一個小隊の抑留者の運命など知る由もない。

そして、十一月十二日、雄吠泊を引き払って、

大泊東部に移動、私たちは労働第五二一大隊と呼ばれる部隊の第三中隊に編入される。この労働大隊は九月十五日に敷香で編成されたといい、その一個中隊だけがここに来ていた。中隊長は同期生の小室厚少尉、相擁して邂逅を喜んだ。ここでワッシャ軍曹、カラリョフたちと別れる。

寒風肌を刺す昭和二十年暮れ、私たちは大泊埠頭で、どこから積んできたのか、北朝鮮、アメリカからの物資を揚陸する作業を続けていた。抑留者たちは深夜の波止場の灯の下で、わずか五分の休憩にも陸揚げした鉄材の蔭にうずくまって眠った。零下二〇度の中、夏服のままであった。分隊長の岡崎伍長が無心に眠る部下に、自らの夏外套を脱いで掛ける姿は悲哀であった。

こんな毎日毎夜が二カ月も三カ月も続いた。ゆれ動く心の中で「お稲荷さま」という占いにあきらめと希望とを織りまぜて、マホルカを巻く手先も鮮やかになっていった。

北上

昭和二十一年二月、私たち二個小隊は豊原南郊の豊南で油にまみれてドラム缶搬出作業をしていた。それもわずか二週間で、またしても突如作業中止。荒れ果てた村に残留していた美人の娘さんの安否を気にしながら、暮れた雪の宵、たつ。二月十九日だった。積雪をかきわけて、大泊にいる本隊へ徹夜の復帰であった。そして未明、直ちに反転、貨車に積み込まれる。用用にワムの入口の重い扉を三十センチほど開け、外側から針金で幾重にも締められた。これが抑留者の輸送であった。

列車は零下二〇度の樺太東線を一路北上、二月二十四日未明、知取、新間を過ぎたころか、列車が半ば凍った川を渡ったなど夢うつつに感じていたとき、横にいた星曹長が「二人逃亡しました」と叫ぶ。

この凍ったツンドラの、どこに生きる道があるのか。私は星曹長と二人して扉のすき間から体を

乗り出して手を振って、「ストリー、ストリー」と連呼した。何が最善であるのか、ここでは凍死してしまおうと短絡した私の浅慮だったのか、いつも重大なとき、私はうるたえるばかりであった。最後尾の緩急車の歩哨の自動小銃が私を目がけて激しく火を吹いた。弾が耳をかすめる。列車は無人の小さな駅の引込線で急停車した。私は扉の針金を引き開いて雪のプラットフォームに降り立った。幾人かの歩哨が機関車に乗って捜索に引き返していった。

無事を祈る。捕らわれんでくれよと願った。

しばらくして、数発の銃声。

機関車が帰ってきた。

炭車から一人の死体がレール脇にたたき落とされた。M上等兵の骸であった。階級章に弾が貫き、軍服は破れ、顔と胸の血潮はすでに凍っていた。およそ三十発のマンドリンの弾だった。三十三歳、北海道の留守宅に奥さんと二人の子供が待っているのに。非業の死であった。

私は上等兵を抱き起こし「なぜ、おれと一緒に日本に還ってくれなかったのか」と嗚咽するのみであった。小室少尉が扉のすき間で私を凝視していた。召集兵の彼には誰にも語らない深い思いがあったのか。捕えられたもう一人が、「殺してくれ」と私にしがみついた。私が突き倒すと、ソ連の老中尉に向って「射て」と訴え、銃を構えたとき、他のソ連将校と同時に私はその銃を払いのけた。わずかに開いた扉の中から、中隊の兵隊がかたずをのんで成り行きを見守っていた。私の処置はどうだったのか。動揺ばかりしている愚かな指揮者に部下は泣いているのだと自嘲するばかりである。

誰も知る由もない凍土での敗戦による悲劇であった。

M上等兵の遺骸と拘束された兵隊は歩哨たちの乗る最後尾の緩急車に乗せられた。発車間際、私は駆けて行って私の汚れた手袋を車内に投げ込んだ。

汽車は二十五日、早朝に泊岸炭鉱に着いた。分隊員がM上等兵の右親指を急いでもぎ取って秘かにだびに付し、飯盒に入れた。それから炭鉱東南方の名もない小さな丘で、分隊長は上等兵の凍った遺体を抱き起こして泣き、凍土が掘れないまま、わずかに土を掛けて雪で覆ってやった。私は木炭で書いた墓標を建て、みんなして敬礼のあと、黙って丘を下りた。

ついに、私たちはこの墓標に二度と訪れることが許されなかった。

泊岸炭鉱

石炭掘りの生活が続いた。

雪の朝も雨になった朝もラーゲルの門に並んで、おそろしく不手際な人数検査のあと、三キロメートル先の炭鉱まで歩く。炭鉱の街の廃屋が道に沿って残っていた。むかしの日本人の家であった。

石炭掘りは、初めは露天掘り、二十両の炭車を

二人の兵隊がかじを握り、上衣をなびかせて一気に山を下りる。壮絶ですらあった。そして坑内掘りも始まる。私たちは紺色の炭鉱服を着せられ、坑内帽はキャップランプが光り、坑夫になっていた。戦時中の略奪採炭の坑道は危険極まりなく、落盤に苦しんだ。切羽で響くドリルとダイナマイトの騒音の中、兵隊たちは汗と炭塵で阿修羅の形相であった。異国となってしまう地下深く、とらわれの一団は黙々と石炭を掘るのである。

やがて多くの兵隊の歯ぐきから、すねから血が滲み出た。両脚が紫色に腫れてきた。壊血病である。ラーゲルの入口でトドマツを煎じた脂の漂う水を飲み続けた。

ソ連が言う抑留者の規定は知る由もなく、私たちは全期間を通じて一コペイカの労働対価は給せられず、基準量二七〇〇カロリーのうたい文句の中味は語るも哀れであった。時に掛飯一杯の大豆の水煮が主食、副食はわずかに底に沈んだスープだけ。兵隊たちは手製の皿とスプーンで、その大

豆を一粒一粒口に運んだ。こんな食事は毎日とは言わないが、赤子の掌大の乾燥した黒パン、身欠鯨半匹になれ親しんだ。そして自作のマージャンパイに威勢よい掛け声を上げた。

疲労こんばいして炭坑から帰りついたある宵、裸電球の下で兵隊が群がっている。廃屋の軒先で拾ってきた古新聞の切れ端をじっと見つめているのである。見れば「六神丸」の広告。兵隊たちはようやく日本の文字に飢えてきた。やがて兵隊たちは作業帰りの薄暗がりに乗じて廃屋に突入、マンドリンが火を吹いて雪煙りの舞う中を、手当たり次第に本という本を抱えて来た。休憩の時も深夜に至っても、兵隊たちは本を読みふけた。次の順番が待っていたからである。

しかし、抑留者にはこんなぜいたくは断じて許されることではなかった。ソ連兵が読書をしている姿を見たこともない。その彼らの手で一網打尽、作業現場とラーゲル内で一挙に摘発、われらが宝物は根こそぎ燃えるドラム缶の中に投げ込ま

れてしまった。

「焚書」である。

しかし、兵隊たちは繰り返し、廃屋からの本の探索を試みたが、それは無理な話であった。あげくは、私の手元に、二冊の本が隠されるのみとなる。ドストエフスキーの『罪と罰』、パスカルの『パンセ』の二冊。時に私はこの本のことを兵隊たちと語りながら持ち続ける。

昭和二十一年五月半ば、炭坑のまわりには残雪があった。

また、突如移動命令。

小隊員七十余人は無蓋車に装具を並べ、その上に乗って、いづれかへ連れて行かれる。

発車して間もなく車上に全員起立、線路の右の丘に眠るM上等兵に決別の敬礼をして別れた。誰かが心が裂かれるような声で「上等兵！」と呼んだ。幾人かがそれに和して、悲しい声が雪山にこだました。

永訣ということは、抑留者になって、なお兵隊

にはつきものだった。M上等兵は今に至るまで、なお凍土にある。

多来加^{タライカ}から真岡へ

昭和二十一年五月十五日、樺太も早春、珍しく花曇りであった。

私たち二百四十人の中隊は、敷香の東方、多来加湾のなぎさを東に向かつて歩いていった。ジプシーのごとく流浪するのである。東多来加に着く。ここが私たちのねぐらであった。戸数十五戸くらいか、小さな栈橋に数人の日本人、ロシア人、離れてギリヤーク人かオロッコ人がいぶかしい顔で立っていた。萌え出た薄緑の浜辺にガンコウラン、砂地の奥にハイマツとフレップの実が待っていた。そしてその州を行くと、突如新しい杭で囲まれた「間宮林蔵上陸之地」の標柱が建つ。やつとの思いで初めて戦没した戦友の慰霊祭を行い、遺骨を飯盒から出してやって、語り合う。トドマツ、エゾマツ、ドロノキの流送作業に

毎日が暮れるが、小隊一日のノルマ八〇〇立方メートルに毎晩鉄棒を振り回して来るジェレベニコ上級中尉と争うのが日課であった。

しかし、村に一人いる日本娘のことを語り合う日露の爆笑やレニングラードで二人の息子を失ったロシアの老婆の慰めに日本兵も心を温められた。プーシキンを語り、ドストエフスキーを話しても何の反応もない。ソ連将校と下士官が、革命の日々を語る冷酷な数々のことに私は戦慄した。それは「無辜なる民の血をまるでシャンペンの酒のように流す」ロシア人の姿であったのか。それまでに、ソ連兵の中に幾人かのロシア人を見た。粗末な平服をまとうて運命の中で生きていくロシア人である。ギリシャ正教を破壊していく革命の士よりも、深い懷疑と「ニチェボー」を漂わした土深いロシア兵に私は魅せられる。スメルジン軍曹やカザコフ一等兵はそんなロシア人であった。西欧派とスラブ派の激突の歴史、オブローモフ主義かデオニソスのか、その精神地理に私は困惑し

た。

彼らは私たち抑留者を差別しなかった。二人は別れる日、東多来加のなぎさで相擁して泣いた。

とくにカザコフは一度たりとも自動小銃の銃口を向けることはなかった。

多来加の四季は五月から十月までである。私が雑文・雑詩を書きなぐった「多来加ノート」四冊ができた。あちこちで集めた紙をとじたノートである。この拙い記録を日本に持ち帰りがたかった。そんなことを思っている時にいかだ作業は突然中止。昭和二十一年十月十五日であった。出発のとき、棧橋にはうわさの娘さんをはじめ十数人の日本人と移住してきた幾人かのロシア人が立っていた。

敷香駅までは二十七キロメートル。

駅はみぞれにぬれていた。暗闇の貨車であわただしく他の日本兵の部隊とすれ違う。互いにどこへ連れられていくのか。

着いた所はかの真岡であった。旧真岡中学校講

堂で、突然「ダモイ」を告げられる。もう、誰も歓声はあげなかった。私たちは連日、「ブイストレ、ブイストレ」と引揚収容所の建設作業だった。

本当の「ダモイ」の日を迎える。私は「多来加ノート」四冊を校舎横の階段の蔭で細々と破り捨て、『罪と罰』『パンセ』を校庭の高台にある石の上に揃えて置いた。私にとって一番大切な、手垢に汚れた「人名簿」を左の靴底に忍ばせた。縦十五センチ、横八・五センチ、十二ページの名簿である。

十二月五日、校庭に二、九一五人の旧将兵が整列、出発の号令を待った。七十余人の私の小隊員全員、雑のう深く納められていた巻脚絆が、その結び目もりりしく、かつての日の衿持を語るように結ばれていた。その先頭を、私は息をもつかず白竜丸（三、一八一トン）のタラップを一気に駆け上った。

「これでよし」と思った。船は母国の函館に向

かい出港した。

私にとって抑留とは何であったか。まれに見る独裁専制国家の許されざる恣意によって、私たちは労働のためにのみ抑留され、飢えと苦痛と望郷の歳月であった。日本も世界も歴史も無情なものであり、このことは消え去ることのない屈辱である。

しかし、この事実によって、人間の尊厳を確認したこと、いま交友は絶えても生涯の日露の友を得たこと、耐えること、学ぶことの意義を教えられた。

私の抑留は、シベリアのそれと比べて短期間であり、思想洗脳もなく、苛酷なものではなかった。非業の死を遂げた多くの人たちを憶うとき、ただ断腸、生きて還って何を言うかと自戒するばかりである。

私の小隊員の多くはすでに鬼籍に入り、その消息は絶えた。わずかに、九十歳を越えた札幌市に

住む盟友安江徳一上等兵はじめ数人のみ。これらの生きた証人によって、この記憶が語り継がれ、わが国や世界、とくにロシアの歴史書に永久に抑留の史実が記されることを願ってやまない。

【執筆者の紹介】

大正十一年九月二日 愛知県豊橋市小浜町に生まる

昭和十七年三月 愛知県岡崎師範学校卒業

四月 愛知県八名郡山吉田村国民学

校勤務

十二月 現職のまま入隊

関東軍第二九師団第一八連隊

仙台陸軍予備士官学校を経て

前橋陸軍予備士官学校卒業

樺太混成旅団歩兵第一二五連

帯に転属

陸軍少尉

昭和二十年一月 第八八師団歩兵第三〇六連隊

に転属

八月 樺太国境に向かい、落合で自

衛戦闘

八月 敗戦により抑留

昭和二十年九月 南樺太各地で重労働

昭和二十一年十二月十二日 サハリンより復員

復員後の職歴

昭和二十二年四月 豊橋市内の小、中学校に勤務

昭和二十八年三月 慶応義塾大学文学部史学科通

信卒業

昭和四十四年四月 愛知県科学教育センター勤務

昭和五十三年四月 豊橋市内中学校長勤務

昭和五十八年三月 停年退職

昭和六十三年十月 豊橋教育委員会教育長 勤務

四年

平成四年四月 豊橋市美術博物館長 勤務五

年

平成九年三月 公職を退き現在に至る

主な著書

「歩兵第六十八連隊史」

「われあかあかと生きたり」

「旅はどのあたりか」 (以上、自費出版)

その他共著多数

賞

平成五年 愛知県教育委員会

平成五年 勲五等双光旭日章

平成九年 豊橋文化賞

平成十年 愛知県知事表彰(教育)

(愛知県 斉藤 高志)

私のシベリア抑留記

三重県 太田 勇

一、抑留の経緯

私は終戦の玉音放送を中国東北部(旧満洲)の興安嶺山中で聞き、三年間シベリアに抑留された後、昭和二十三(一九四八)年ようやく復員した